港区長賞

きっかけは「砂時計」

三田中学校　一年　小原里菜

地球が泣いている。いや怒っているのかもしれない。日本では、台風や洪水、竜巻などが各地で起こり、大きな被害をもたらしている。海外でも、二酸化炭素の増加による地球温暖化の影響で、北極・南極の氷が解け、海水面の上昇、洪水、干ばつなど世界各地で異常気象が相次いでいる。

このような災害を知るたびに、私は、何かしなければならないという気持ちになる。被害が深刻になればなるほど、不安な気持ちもつのる。この不安をなくすためには、環境に対する行動を起こさなければならない。私には、その第一歩となった出来事がある。

去年の夏、私は港区の海外派遣性としてオーストラリアのメルボルンに九日間行き、現地家庭にホームステイさせていただいた。広大な大地と豊かな自然、食べ物など事前にイメージしていたオーストラリアは、深刻な水不足問題を抱えていたのである。室内のシャワーが四分間と決まっていた。脱衣所には砂時計があり、自分で時間を計れるようになっていた。日本ではお風呂にゆっくりとつかり、時間をあまり気にせずシャワーを使っていた。私は、時間を計ることに驚き戸惑った。しかし、ホストファミリーから水不足による森林火災や干ばつなどの被害で困っていることを教えてもらい、節水に協力しようと思った。手洗いや食器洗いの水も極力少なくし、家族の一員として水の使用を減らす努力をした。

帰国した後、家族に水の話をして、私は砂時計を買った。見れば見るほど夢中になってしまう。デジタルの時計よりも、懐かしい優しい気持ちにさせてくれる時計だ。寒い冬には四分間では足りないが、夏には充分足りる時間に変わった。大阪と神戸に住む祖父母たちに説明して、砂時計をプレゼントした。

日本に住んでいる時は、水不足の意識が足りなかったと思う。水道の蛇口をひねれば、衛生的で飲める水がいくらでも流れてくれる。断水といっても、水道の点検の時ぐらいで、長時間に亘ったことはない。水を惜しげもなく使う私達は、間違っているのではないだろうか。同じ地球上で、水が足りなくて困っている人はたくさんいる。私は、この体験を通じて、水を大切にしようと決意し節水を実行している。いつかこの砂時計をホストファミリーに見せてあげたい。

水は留まるものではなく、循環しているとも言われる。川、海に流れた水は、蒸発し雲から再び雨となる。私達の使用した水は、地球をめぐりめぐって手元に帰ってきてくれる。だからこそ、毎日水が使えることに感謝しなければならない。

環境を守ることは、私達の将来を守ることにつながる。水を守ることは、私達の身体や健康を守ること、未来の子ども達を救うことでもある。これからの生活でも意識と行動を見直しながら、水を大切に扱っていきたい。